

ミッドウェー海戦後の連合国側の戦略

フィリップス・オブライエン

歴史家は大戦争の決定的な転換点はいつなのかという議論にふけるものだが、第二次世界大戦の太平洋戦域の場合、西洋の特にヨーロッパの歴史家にとってのそれは1942年6月のミッドウェー海戦である。ほとんどの歴史家が、この海戦のあと太平洋戦争の方向性が決まったと結論づけている。日本はアメリカの莫大な物量に圧倒され、打ち破られることになったのだ。時間的な推移は多少曖昧ではあっても、最終的な結果は明らかであった。その数週間後の第一次ソロモン海戦、さらにその後数ヶ月間の大型航空母艦2隻の喪失というようなアメリカにとっての大惨事さえ、最終的な勝利に向かう途中で遭遇した些事に過ぎなかった。

したがって、本稿で検討する期間、すなわちミッドウェー海戦と、太平洋戦争におけるもうひとつの「決定的な」戦いとされるマリアナ沖海戦（1944年6月）に挟まれた期間は、たとえ決定的な作戦行動は比較的少なかったとしても、計画と組織の期間であったとしばしば目されている。戦闘が行われた海域という点では、若干注目すべき点がある。1943年後期のギルバート諸島上陸まで、太平洋における戦いのほとんどがガダルカナル島とラバウルの間延びる比較的狭い海域で戦われていた。広大な太平洋戦域全体を考えると、戦闘はそのごく周縁部で発生していたのである。

しかし、ひるがえって考えるに、少なくともアメリカ海軍にとってこの期間は、互角になるための期間と優位に立つための期間、というはっきりと異なる2つの作戦期間に分けられていたため、上記2海戦間の期間を全体として見るのはあまり筋の通ったことではない。互角になるまでの期間はミッドウェー海戦から1943年夏までで、実際のところ戦争の全期間を通じて最も困難な時期であった。アメリカ海軍は、全体的に優位とはいえない状態で、依然として強力な日本海軍に対抗して、攻撃的態勢に切り換えようとしていた。制海権を保証することは全くできず、広い作戦海域において敵の制海権確保を阻止することさえできなかった。実際、夜戦能力および魚雷技術などといった一部の領域において、特にこの期間の初めには、アメリカ海軍は明らかに後れを取ったままであった。

他方、本稿の第二部で取り扱う1943年春/夏以降は、さらに大きな野望を持った期間であった。アメリカ海軍の装備機材は、量の点でも質の点でも（最もよく知られているのはエセックス級空母および新型航空機）遙かに攻撃的で拡張的な戦略を目論む能力を与えた。アメリカ海軍がはじめてその時点までの空母喪失を埋め合

わせることができたのは、1943年5月のエセックス級空母「バンカー・ヒル」の竣工時であったことを見れば、この変化が時間的にどれほど遅かったのかが分かる¹。アメリカ海軍が1941年12月7日時点よりも空母艦隊（空母4隻編成）を1個多く保有するに至るには、実に1944年1月の空母「フランクリン」の就役まで待たなければならなかったのである（図1参照）。

¹ アメリカ海軍の艦隊空母喪失状況は次のとおり：「レキシントン」(1942年5月8日)、「ヨークタウン」(1942年6月7日)、「ワズプ」(1942年9月15日)、「ホーネット」(1942年10月26日)。エセックス級空母の最初の8隻の就役状況は次のとおり：「エセックス」(1942年12月)、「レキシントン」(1943年2月)、「ヨークタウン」(1943年4月)、「バンカー・ヒル」(1943年5月)、「イントレピッド」(1943年8月)、「ワズプ」(1943年11月)、「ホーネット」(1943年11月)、「フランクリン」(1944年1月)。第二次世界大戦中のアメリカ海軍の全戦没艦艇および建造艦艇の完全な一覧は次を参照：The United States Navy at War, 1941-45 : Official Reports by Fleet Admiral Ernest J. King (Washington DC, 1946), Third report of the Appendices B および C。これら報告書の完全版が以下のアドレスでも参照できる：
<http://www.ibiblio.net/hyperwar/USN/USNatWar/index.html>

実のところ、この2つの期間の期待されるような相違を最初に明確に述べたのは、アメリカ海軍のトップ、アーネスト・キング大将であった。1942年11月、カサブランカ会談の準備中、キングは今後の戦争の見通しについて概要を述べるよう依頼された。残念なことに多くの人がそうする傾向があるのと同様に、キングはスポーツになぞらえることにし、戦争をボクシングの試合にたとえた²。つまり、アメリカを、反撃する前にまず相手の気が狂ったようなパンチの雨に耐えなければならないボクサーにたとえたのである。キングは、戦争をそのようなものとして4段階に分けて説明した。

- 1) アメリカが日本の攻撃に対して自身をすっぽり包んで保護しなければならない防御フェーズ。
- 2) アメリカが依然として自身を防護しなければならないが、反攻の開始を期待しはじめることができる防御-攻撃フェーズ。
- 3) アメリカが依然として一方の拳でカウンターブローを打たなければならない

² Thomas Buell, *Master of Sea Power: A Biography of Admiral Ernest J. King* (Boston, 1980), p. 265.

いが、もう一方の拳で敵に強いパンチを打ち込むことができる攻撃-防御フェーズ。

4) アメリカが全力で敵を打つことができる攻撃フェーズ。

1946年に(戦争終結報告書で)アメリカ海軍の太平洋戦争中の戦略を説明するのにもこのたとえを使っていたところを見ると、キングは明らかにこのたとえが気に入っていた³。

アメリカの戦略と戦術がどのように変遷していったかを見るには、全期間を対象とした極度に短く薄い変遷史ではなく、一つ一つの決定に集中するのが最良の方法である。本稿では、それぞれあり方は大きく異なるが、太平洋戦争を研究する歴史家や学者の主要な論議の対象となっている決定を取り扱う。第一に、作戦行動中に下された、実際には戦術的決定であるが、厳しい批判の対象になっている、ガダルカナル島付近の海域から空母任務部隊を引き上げるという1942年8月7日のジャック・フレッチャー提督の決断を取り上げる。第二には、戦争の最終的勝利に向かう戦略を理解する上で遙かに重要なものとして、ともに太平洋を横切って移動する計画、ダグラス・マッカーサー陸軍大将のフィリピンに向けた進撃と、チェスター・ニミッツ海軍大将のマリアナ攻略戦を取り上げる。

フレッチャー提督とガダルカナル島上陸戦における海軍航空部隊の使用

ミッドウェー海戦の栄光を身にまとうアメリカ海軍士官の中で、フレッチャー提督はあまりにも厳しい批判を受け立場を失った人物である⁴。チェスター・ニミッツとレイモンド・スプルーアンスが依然として最高の尊敬を受けている一方で、フレッチャーは今や大衆からほとんど忘れ去られ、いくらかの例外はあるにしても、第二次世界大戦を研究する歴史家から繰り返し批判されてきた。こうした批判の理由はほとんどすべて、1942年8月のガダルカナル島上陸戦の際、同島沖で空母打撃部隊の指揮を執っていた際の振る舞いをめぐってのものである。

フレッチャーは確かにガダルカナル沖では極度に用心深かったように見える。フレッチャーは、8月7日の海兵隊の上陸を支援する任務を帯びた空母部隊の指揮を執っていたが、特に、ビスマルク諸島方面に一連の航空基地を設置していた日本の

³ *The United States Navy at War, 1941-45: Official Reports by Fleet Admiral Ernest J. King* (Washington DC, 1946), p. 39.

⁴ フレッチャーを批判する見解はさまざまなところにまとめられている。以下はその例である：Hary A Gailley *The War in the Pacific: From Pearl Harbor to Tokyo Bay* (Novato CA, 1995), pp 179-81. H. P Wilmott, *The War with Japan: The Period of Balance May 1942-October 1943* (Wilmington DE, 2002), p. 110.

航空部隊の履域では、部隊を危険な位置から引き離しておくことに熱心だったように見える。疑いもなく合衆国が保有する最重要の艦艇である空母を必死に守ろうとして、表向きは燃料補給のため（ただし、これは依然として非常に多くの論議的となっている）丸2日も経たないうちに東に避退した。

避退したことで、日本海軍がこの戦争全体を通じて最も見事な戦術的攻撃を発したときに、空母部隊はそれを阻止または撃退できる位置にはいなかった。在ラバウルの日本海軍第八艦隊司令長官三川軍一中将は、アメリカ軍のガダルカナル侵攻に素早く向こう見ずに反応した。麾下部隊の優れた夜戦能力を信頼していた三川は、アメリカ侵攻軍に立ち向かうため重巡洋艦5隻を含む出撃可能な全艦を連れて出港し、ガダルカナルに向かった。

その結果として発生した海戦は、アメリカではサボ島海戦（Battle of Savo Island）と呼ばれている（訳注：日本側名称は第一次ソロモン海戦）が、アメリカ海軍にとっては災厄だった。1942年8月9日の夜明け前、三川の艦隊はガダルカナル島北岸に到着し、事前の警報を受けておらず、日本艦隊の存在を知らずにいた米豪混成海軍部隊に遭遇した。日本軍は、アメリカの重巡洋艦3隻（「アストリア」、「ヴィンセンズ」、および「クインシー」）とオーストラリアの重巡洋艦1隻（「キャンベラ」）計4隻撃沈という戦果を上げ、戦術的には全面的な勝利を収めた。日本軍はその後、妨げられることなく「溝（Slot）」（訳注：ラバウル/ガダルカナル間の島に囲まれた海域を指す米将兵の通称）を通過して撤退できた。

交戦からのこの避退行動はフレッチャーの評判を損なうこととなった。フレッチャーに向けられた批判は、以下の3点に要約できる。

- 1) 巡洋艦隊が潰滅したことを考えれば、フレッチャーは、ガダルカナル侵攻部隊を、その後数か月間、陸海空からの日本の連続攻撃に曝されるままとしたことになる。
- 2) 燃料が枯渇したという虚偽の報告をした。
- 3) フレッチャーは三川の部隊が無傷で脱出するままに放置した。

こうした批判は、戦闘終了後ほとんど即座に始まり、現在に至るまで続いている。ガダルカナル島の海兵隊員はフレッチャーのことを、臆病で陸上の兵士よりも自分の船に価値を置く典型的な海軍軍人だと考えた。権威ある第二次大戦史家サミュエル・エリオット・モリソンは、フレッチャーは日焼け以上の脅威にはさらされてい

なかったとして、その用心深さをあざけている⁵。

その後数十年間、こうした批判は、どちらかといえば、より強くなっていった。アラン・ションは 2004 年の著作で、フレッチャーは独力でガダルカナルの戦いを数か月引き延ばした、と非難している⁶。またウィリアム・ブルース・ジョンソンは、2006 年の著作で、フレッチャーは臆病であったとしてさらに激しくこき下ろしている⁷。

過去数年間、マービン・ブッチャーとジョン・ランドストームを中心とするフレッチャーを擁護するグループが、こうした議論の方向性を変えようと試みてきた⁸。彼らはフレッチャーが極めて不確かな状況下で作戦行動しており、アメリカに残存している唯一の空母打撃部隊の司令官として極めて大きなプレッシャーを感じていたということを指摘している。彼らがフレッチャーの行動に与えた免責はいくつかの簡潔な要点にまとめることができる。

- 1) 情報活動の失敗により、フレッチャーは三川艦隊の動きについての事前の通報はまったく受け取っていなかったし、仮に空母部隊をガダルカナル付近にとどめ置いた場合でも、巡洋艦を守ることは不可能であったらう。
- 2) フレッチャーは、何よりもまず空母を守らなければならないというニミッツの命令を受けていたため、単純にその命令に従った。
- 3) フレッチャーのその後の行動、特に第二次ソロモン海戦（1942 年 8 月 24 ~ 25 日）中に見せた行動は、彼は臆病者などではないし、必要な場合は空母部隊の攻撃的運用も指揮できるということを示している。

フレッチャーに対する二つの見方の論争について、本稿で決着を付けることはできないし、筆者にはその意図もない。興味深いことは、そうした議論において、当時アメリカ海軍が置かれていた位置について、また、アメリカ海軍がわずか数か月後の状態に比べてかなり運次第の状態にあったということを経験によっては認めたくないということについて、論者が自分の見方をどう述べているかである。フレ

⁵ Gerald Astor *Wings of Gold, The US Naval Air Campaign in World War II* (New York 2004), p. 118.

⁶ Alan Schom *The Eagle and the Rising Sun: The Japanese-American War 1941-43: Pearl Harbor through Guadalcanal* (NY, 2004), p. 346.

⁷ William Bruce Johnson *The Pacific Campaign in World War II: From Pearl Harbor to Guadalcanal* (New York, 2006), pp 192-5.

⁸ John B. Lundstrom *Black Shoe Carrier Admiral: Frank Jack Fletcher at Coral Sea, Midway and Guadalcanal* (Annapolis 2006), pp 381-92. Marvin Butcher 'Admiral Frank Jack Fletcher, Pioneer Warrior or Gross Sinner', *Naval War College Review* (Winter 1987).それほど詳細ではないがフレッチャーを強く擁護したものとして次がある：Douglas V. Smith *Carrier Battles: Command Decision in Harm's Way* (Annapolis, 2006), pp 163-4. Gerald Astor *Wings of Gold, The US Naval Air Campaign in World War II* (New York 2004), pp 118-20.

フレッチャーの批判者たちは、エセックス級空母の大量就役が実現しようとしていたことを知っているために、少々自信を持ちすぎているのではないかと筆者には思える。フレッチャーはアメリカ海軍の最も価値ある資産を預かっており、兵力がほぼ同等で支援基地を近くに持つ艦隊と戦っており、いまだかつて誰も十分な訓練を受けたことのない任務を遂行していた。マハン流の戦術からすれば、フレッチャーの立場は前例のないものだった。情報なしに交戦しようとしており、極めて重大なことには、関連目標（ガダルカナル島）が実際のところ空母打撃部隊の喪失と引き替えにするほどの価値があるのかという問題が未解決だったのだ。

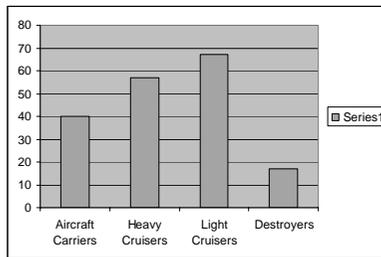
それはアメリカの情報活動の失敗であり、フレッチャーの行動に誤りがあったわけではなかったが、それにより三川中将の艦隊は探知されることなくガダルカナル周辺海域にこっそり入り込むことができた。ひとたび侵入してしまえば、日本海軍の優れた夜戦能力を考えれば、三川がアメリカに大損害を引き起こすのは必定であった。臆病との嫌疑も、不自然なほど冷酷であるように思える。フレッチャーは、艦載機による陸上部隊の支援という、それまで誰もやったことがなく、計画されたこともない作戦行動を試みていた。また、第二次世界大戦全体を通じてアメリカ海軍が直面した最も危険な海域で行動していた。

ガダルカナル沖の海戦は、この戦争中アメリカ海軍が経験する戦闘の中で、疑いなく最も困難なものであった。3 か月の間に、海軍艦艇および航空機との無数の小規模交戦があったのはもちろん、第一次ソロモン海戦、第二次ソロモン海戦、サボ島沖海戦、南太平洋海戦という大規模な海戦が4 回も発生していた。アメリカ海軍が被った損害は甚大だった。1942 年8 月8 日から11 月15 日の間のガダルカナル島沿岸部で、アメリカ海軍は、戦時中に失った艦隊空母全体の40%、重巡洋艦の57%、軽巡洋艦の67%を失い、さらに特筆すべきは駆逐艦の17%を喪失していたのだ（図2 参照）⁹。この駆逐艦の喪失数は重要である。アメリカ海軍は戦争全期間を通じて（太平洋と大西洋両方で）71 隻の駆逐艦を喪失しているが、そのうち12 隻がガダルカナル沿岸で失われているということが、戦闘の激しさを物語っている。1 回の作戦または戦闘での喪失数でこれに匹敵するものはないのである。

⁹ 次を参照： *The United States Navy at War, 1941-45: Official Reports by Fleet Admiral Ernest J. King* (Washington DC, 1946), Appendix C. 実数は次のとおりである：航空母艦5 隻中2 隻（戦時中最後に撃沈されたアメリカ空母「プリンストン」が満載排水量15,000 トンの中型艦であったため、この数字は実は4 隻中2 隻とすべきではないかという議論がある）、重巡洋艦7 隻中4 隻、軽巡洋艦3 隻中2 隻、駆逐艦71 隻中12 隻。

図 2

Percentage of all American Naval Losses that were suffered off Guadalcanal August 8-November 15, 1942



フレッチャーがこのような水域に指揮下の空母を放置することをためらったことをもって臆病と言うことはできない。フレッチャーは、敵が大規模な陸上航空部隊を使用でき、敵の能力と情報活動についての情報が（よくても）限定的である戦域で行動していた。この状況は、慎重さが攻撃性よりも遙かに望ましかったという点で、ミッドウェー海戦で山本五十六大將が直面していた状況に似ていなくもなかった。

しかし、だからといってフレッチャーにまったく責任がないというわけではない。フレッチャーに対して本当の当を得た批判があるとすれば、それは、三川艦隊の無傷の脱出を許したことだろう。日本軍には直衛のための空母がなく、基地への帰還中に間に合うように発見された場合は脆弱であっただろう。帰路での攻撃がなかったということは、ガダルカナル島のアメリカ軍に対して水上艦艇による夜襲は可能だということを示したことになり、補給を適切に維持するためには非常な努力が必要になるということの意味していた。しかし、仮にフレッチャーが三川艦隊への攻撃が可能な位置にいたとしても、日本の艦のどれかを沈めることができたかどうか、あるいはフレッチャーの空母が無傷で後退できたかどうか、確実に分かるわけでは

ない。サムエル・エリオット・モリソン資料館には、第一次ソロモン海戦の際に三川のもとに勤務していた士官、大前敏一からのモリソン宛の非常に興味深い手紙が保存されている¹⁰。大前は「溝」を南下中に三川が取った極端な（そして極度の成功を収めた）発見回避策を詳述している。また、ある会報に掲載された 1957 年の記事で、大前は、「溝」を北上中の三川艦隊では、アメリカ軍機の追跡がなかったのもむしろ動揺していた、と主張している。「数時間経過したが、視程内に敵機の姿はなかった。前日午後にあれほど大きくはっきり聞こえた敵空母の交信もまったく受信できなかった。追跡されていないと分かって安心したが、これでは味方機が敵空母を捕捉できる見込みは全くないと考えて士気は低下した」¹¹。

フレッチャーの容疑を全面的に晴らそうと考えているわけではないが、大前の上記の証言が示すとおり、日本軍をガダルカナル島から追い出す戦いは、アメリカにとっては極めて危険なものであった。アメリカ海軍には、本格的な海軍の優位などまったくなかったし、制海権はもちろぬ敵の通航の阻止も実行できなかった。この互角の期間、アメリカ海軍が防御のためうずくまった状態から最初の攻撃に立ち上がりつつあるという独特の危険がある期間だった。フレッチャーが用心深かったのは、ほとんど驚くにあたらない。

1943 年—攻撃地点の決定

本稿後半部の主題としたこの問題は、太平洋におけるアメリカの戦略について、これとは別にダグラス・マッカーサーの評判という大きな論議的（または世論の評価）があったために、これまで部分的にしか論じられてこなかった。ジャック・フレッチャーについての評価は低下してきたかもしれないが、マッカーサーについての評価は、学界の一部で時代の変化とともに大きく低下した。第二次世界大戦と、名高い仁川上陸作戦が行われた朝鮮戦争の後、マッカーサーは比類のない軍事的英雄と広く認められていた。1950 年代は、マッカーサーの政治的信条をひどく嫌う人でさえ、マッカーサーを戦略の天才として称揚することが分別のあることだと考えていた¹²。1977 年になっても、マッカーサーの伝記映画（ほとんどが肯定的内容）

¹⁰ ハーバード大学サムエル・E・モリソン資料館、HUG FP (33.41) Box 37、大前からモリソンへの 1962 年 4 月 27 日付書簡。

¹¹ Toshikayo Ohmae 'The Battle of Savo Island', *United States Naval Institute Proceedings* (December 1957), Vol 83, #12, p. 1276.

¹² モリソン資料館には、当時新刊だったマッカーサーの伝記についての素晴らしい書評（ルイス・モートンによる）の切り抜きがある。モートンは明らかにマッカーサーについて懐疑的であるのに、マッカーサーの軍事的能力への賞賛を重ねているのだ。「ハンサムで優雅、心の底から勇敢で、極めて知的、読書家で、魅力的な会話の相手であり、雄弁家でもあるマッカーサーは、人の心を奮立たせる指導者に

がグレゴリー・ペック主演で作られたのである。

しかし、最近 20～30 年間、このような見方には大きな疑問が呈されるようになってきている。ロナルド・スペクターは、太平洋戦争の歴史をまとめた優れた著作によって、マッカーサー批判の急先鋒となっている¹³。こうした批判が最高に興味深いものであるためには、マッカーサーのフィリピン作戦についての全面的な鋭い批評がかかわっていなければならない。有名な戦前の作戦計画である「オレンジ計画」で、フィリピンは対日作戦の重要な集結地点と見られていたのは驚くにあたらないはずだ。マッカーサーもまさにオーストラリアに到着したその瞬間から、ニューギニアを通過してラバウルに至り、その後フィリピンを取り返す計画の作成に取り組むことになった。しかし、第二次世界大戦の太平洋における進展を考えた場合、戦略をフィリピン諸島奪還の方向に向けるのが妥当なことであったのか、という疑問は残る。

マッカーサーを最も厳しく批判する人々の多くの考えるところでは、マッカーサーがフィリピン諸島奪還にこだわったのは個人的理由からであり、結果としてその作戦における人員ならびに装備の損耗は日本を打ち破るにはまったく不必要なものであった。非難されている点は、基本的に、マッカーサーは自分の評判を守るために麾下将兵の命を犠牲にした、ということである。ウィルモットは、マッカーサーは不正な地位利用により解任されるべきだったと考えている¹⁴。そこまで厳しくはないが、ウイリアムソン・マーレーとアラン・ミレットは、共著による優れた第二次大戦史『A War to be Won』において、マッカーサーの性格の無愛想な側面を強調している¹⁵。

マッカーサーがフィリピンに戻ろうと（他には真似のできないやり方で）戦っていた期間全体を通じて、アメリカ海軍で、かなり早くしかも少ない損失で日本に対する勝利をもたらす代替戦略が策定されていたことを考えると、マッカーサーに対する批判は俄然説得力を帯びてくる。この方針の発展についてこのような理解が可能なのは、おそらく 1942 年遅くから 1943 年の初めにかけて、ガダルカナル戦が、完全には終わっていなかったにせよ、上首尾の結末に向けて進んでいた頃以降であ

必要な資質を残らず身につけている。戦場においては達人、第一級の戦略家として知られており、我々の時代の最も偉大な將軍の一人である。』1954 年 11 月 4 日の『レポーター』に掲載されたルイス・モートンの書評、モリソン資料館所蔵、HUG FP (33.41) Box 38.

¹³ Ronald Spector, *Eagle against the Sun: The American War against Japan* (New York, 1985). スペクターはマッカーサーの作戦行動が、成功したときであっても、代償に見合うだけの価値があったのかという点を批判することに力を注いだ (p.283 参照)。スペクターはマッカーサーの振る舞いのため、フィリピン諸島奪還がより困難になったということを提供する材料を提供している (pp. 529-530 参照)。

¹⁴ Wilmott, *The War with Japan*, p. 94.

¹⁵ Williamson Murray and Allan Millett, *A War to be Won: Fighting the Second World War* (Cambridge MA, 2000), pp 181-2.

ろう。将来の作戦行動に備える計画作成に多大な努力が傾けられるようになったのはこの時期のことであった。これらの努力はアメリカ海軍、特に海軍作戦部長アーネスト・キング大将にとって重要であった。キングは連合軍の戦略上の優先事項と方向性を決定するために 1943 年に開かれた一連の、気力を使い切ってしまう包括的な会談、たとえばカサブランカ会談、トライデント会談、セクスタント(カイロ)会談の準備に取り組んでいた。このプロセスの中で、キングが近代戦を受け入れるようになり、太平洋におけるアメリカの戦略の方向性を確立しようとしていたことが見て取れる。多くの点で、キングについて書かれたものがあまりに少ないのは驚くべきことである¹⁶。フランシス・S・ロー提督は、戦争のほとんど全期間を通じてキングの側近であって、一度モリソンにキングの伝記を書く労を執ってくれるように説得を試みた人物である(モリソンは断った)¹⁷。しかし、そのローでさえ、キングは自分の決定の理由を説明することは滅多になく理解しにくい男であったことは認めている。

第一に、当時アメリカ海軍はどんな構想を持っていたのか。おそらく、最良の情報源は、チェスター・ニミッツがキングに送った 1942 年 12 月 8 日付けの手紙であろう¹⁸。ニミッツはこの手紙で、太平洋の戦いでそれまでに得られた教訓を、アメリカが次になすべきことに関連づけて要約しようと試みている。ニミッツの指摘した要点の概要は次のとおりである。

- 1) 戦意という点では、日本はアメリカと同等である。
- 2) 水上部隊は同様の能力を備えていると考えるべきである(ただし、アメリカのレーダー射撃統制は本格的な利点になる可能性がある)。
- 3) アメリカの航空戦力は質の点で大きく優れている。特に、ちょうど組立ラインを出始めた新型機についてそれが言える。
- 4) ソロモン諸島のアメリカ陸上部隊は、日本軍よりも優れた武器を持ち適応能力が高いことを証明したが、日本軍も進歩するだろうし、アメリカは攻撃地点における優勢を確保する必要があるだろう。
- 5) アメリカ潜水艦隊は、日本のそれよりも優れていることを実証した。
- 6) アメリカが最も劣っているのは魚雷の性能と使用である。

¹⁶ 第二次世界大戦におけるキングの存在の重要性を考えると、キングの大部の伝記が 1 冊しかなく、しかも(立派な著作ではあるが)いまや 30 年前のものであるという点は興味深い。Thomas Buell *Master of Sea Power: A Biography of Ernest J. King* (Boston, 1980)。

¹⁷ モリソン資料館、HUG FP (33.41) Box 37、ローからモリソンへの 1962 年 7 月 13 日付書簡。

¹⁸ Edwin P. Hoyt, *How They Won the War in the Pacific: Nimitz and His Admirals* (New York, 1970), p. 191.

興味深いことに、ニミッツは、この手紙で「バイパス」理論を説明している。これは、後に島伝いに進むやり方で有名になった方針に真剣に触れたものとしては最初のものであった。

また、この時点でのアメリカの戦略的思考についても一つ興味深いこととして、この手紙の時点でのニミッツだけではなく、早い時期のキングも、あるいはマッカーサーは最後まで、従来の戦略的方向性で考えていたことがある。日本に向けた進撃の経路は極めて用心深いもので、一部は戦前の計画に基づいていた。そういうわけで、ラバウルが重要地点と考えられ、フィリピンが主要目標だったのである。

これは驚くべきことではなかった。ラバウルの日本軍基地の拡充が、アメリカ海軍がガダルカナル島での日本軍の飛行場建設の動きに素早く反応することが絶対必要であると考えた理由の一つであった。しかし、ラバウルは、アメリカがフィリピンを通過して中国に至る経路を通して、ゆっくりと秩序だった方法で勝利を目指す計画を立てている場合のみ決定的な重要性を持つ地点であった。日本軍と戦いながらビスマルク諸島を進んでいくのは、極めて難しく長い期間を要すると広く信じられていた。この地域には、一連の自立した日本軍の航空基地が並んでいた。日本軍は、ガダルカナル島が航空機の航続距離ぎりぎりの位置にあってさえ、艦載機に頼ることなく、数か月にわたってガダルカナル島上空の制空権を争うことができた。多数の「ガダルカナル」を繰り返すことは、多数の死傷者と進撃速度の停滞を意味した。

そして、次に、作戦行動の「前進」はどこに向けられるべきかという問題があった。主攻撃軸は直接日本に向かってはならず、実際には中間地点として中国を頼るもので、フィリピンや場合によっては台湾までも交戦地域とする、おそらく損害の多い時間のかかるものであった。それは、圧倒的な武力による作戦行動という保守的で用心深い概念であった。中国において日本に対する戦争を最後の結末まで遂行するためには、大規模な設備が必要になるだろうと想定されていたのも興味深いことであった。この戦略が最終的に日本の降伏に結びつくことはなかったらうと言うことは誰にもできないが、疑いもなく戦争は長引くことになったであろう（原子爆弾を使用しなかった場合）。マッカーサーは、まさにこの進撃経路を離れて考えることがまったくできなかったのである。マッカーサーにとって、フィリピンへの進撃は常に究極の目標であった。そして、そのために最近彼に向けられている批判が極めて重要なのである。

その批判がことさら強力なのは、マッカーサーが進撃に関して古い考えに固執している間に、海軍部内では、私の考えではアーネスト・キングとチェスター・ニミッツを筆頭に、第二次世界大戦の勝敗の分かれ目をよく理解していたということが

理由となっている。この点で、筆者は、第二次世界大戦の終結の仕方について偏見を持っていることを認めようと思う。筆者の考えでは、欧州および太平洋の両戦線で、生産、使用、およびその破壊を含め、航空戦力こそが最重要の構成要素であった¹⁹。航空戦力は戦時経済のほとんどすべての部分で最も高価なものであり、ほとんどの軍事行動の成否を決定するものであった。交戦する両軍がともに明確な制空権を確保できない場合に限り、地上部隊同士の差が結果を左右する重要な役割を果たすことになる。

アメリカ海軍部内では、真珠湾攻撃の直後からすでに、海軍航空部隊がいまや決め手であろうということが明白になっていた。この教訓はミッドウェー海戦の結果によってようやく国内にも伝わることになった。しかし、航空戦力を海軍の見地から、また戦略的に、日本に対して適切に使用する方法については依然として疑問があった。航空戦力の視点から見れば、侵攻を向けるべき論理的な場所はただひとつ、マリアナ諸島しかなかった。

サイパン島、テニアン島、およびグアム島を含むこの列島は、対日本近代戦の鍵であった。その位置は完璧で、日本と南方の占領地との間の海空の交通を遮断できた。また、マリアナ諸島を占領すれば、ラバウルとトラック環礁（1942年後期を通じてアメリカ海軍の作戦立案者が非常にこだわっていた）に対する増援を阻止でき、戦略航空軍を日本に対して使用できた。B29は依然として（極めて高価な）設計段階にあったが、それでさえ、キングが早くから認識していたとおり、マリアナ諸島向けにあつらえたような武器であった。それはこの戦略が具現化したものであり、1943年のアメリカ海軍の方針の発展として最重要のものであった。なお上記は、アメリカが、最高政治指導部と合同参謀本部の両レベルでイギリスと議論した一連の最高戦略会議があったため、部分的にせよ実証可能である。

カサブランカ会談は、1943年1月に開かれたが、アーネスト・キングに率いられたアメリカ海軍は、ラバウル—中国を中軸とする方針をイギリス側に提示した。もちろん、その時は、真の問題は、太平洋にどれほど注力できるのか、ということだった。イギリス政府は、アメリカが大きな兵力を日本に振り向けることを嫌っていた。もちろん利己的動機も少々含まれていたが、ドイツこそが最重要であると考えていたのだ。むしろ、これは日本を最大の敵と考えるアメリカ海軍からすれば嫌忌の的であった。アメリカ海軍は、ヨーロッパに集中した場合、イギリス海軍が設定した方針の枠内で作戦行動する、重武装のタクシーサービスのような任務を与えられると分かっていたのだ。

¹⁹ 次を参照：Phillips Payson O'Brien 'East Versus West in the Defeat of Nazi Germany', *Journal of Strategic Studies* Vol 23, #2, (2000), pp 89-113.

大きな変革の決定的徴候の最初のもは、1943年5月のトライデント会談において現れた。ここでは、英米両国は再びドイツ優先問題について意見が合わなかったが、アメリカ海軍が始めて、マリアナ諸島を制圧し、それを足場に日本に対する最終的勝利を収めるというよく練られて首尾一貫した計画を提示したのだ。キングは、この問題に関して、いかにしてジョージ・マーシャルと膝詰め談判し、アメリカ陸軍を「教育」しなければならなかったかということ語っている。5月21日、キングは、初めて明快なプレゼンテーションにB29を組み込んだ。キングの伝記によれば、キングは的をマリアナに絞っていた。「キングは、太平洋における全作戦は、日本の連絡線の切断とフィリピン奪還に向けられるべきだが、そうするとマリアナが鍵になる。マリアナがアメリカの手に落ちれば、敵のカロリン諸島への海上連絡線は切断され、アメリカ軍は西方のフィリピンまたは中国を攻撃するのにも、西北の日本本土を攻撃するのにも中心となる要地を手に入れることになる、と述べていた」²⁰

戦中を通じてキングの最も手強い批判者だった、英帝国陸軍参謀総長元帥アランブルック卿からごくごくわずかなりといえども是認を勝ち得たところを見ると、このときのキングのプレゼンテーションが瞠目すべきものであったのは明らかだ。戦後、アランブルックは戦争全期間の詳細な日記を公開した。アランブルックは、モンゴメリー元帥は別としてしばしば誰にでも立腹していたようだが、特にキングは悩みの種であった。アランブルックはキングの飲酒癖をばかにし、プレゼンテーションが支離滅裂であるとしてけなした。しかし、そのアランブルックでさえ、キングの5月21日のプレゼンテーションには非常に満足したようで、なんのためらいも反論もなく受け入れた。「どちらかというとな楽な日で、午前9時に参謀本部の会議があり、続いて10時30分に合同参謀本部会議があった。議題は難しいものではなく、論争も少なかった。太平洋問題を討議し、提案内容が承認された」²¹。

キングをこの方針の主な推進者と考えるのは興味深いことだ。しかし、実際、キングは最初にマリアナを推した人物で、しかも最も強く主張した人物であるようだ。1943年5月までの間、ニミッツはカロリン諸島トラック環礁の占領に強くこだわっていたようである。トラックこそが日本の戦略的防衛網の要であると考えていたのである²²。しかし、トライデント会談の後の5月28日、ニミッツと話し合うためキングが西海岸まで飛来した。ニミッツは、この時以降方向転換し、マリアナに焦点を絞ったようである。中部太平洋攻勢は、このときにはマッカーサーの南太平洋攻

²⁰ Buell, *Master of Sea Power*, p. 337.

²¹ Alex Danchev and Daniel Todman (eds), *War Diaries of Field Marshal Lord Alanbrooke, 1939-45* (London, 2001), p. 408.

²² Hoyt, *How the War was Won*, p. 207.

勢と並行して進められることになっており、マリアナ諸島到達の手段としてギルバート諸島とマーシャル諸島において開始されることになった。これは、クワドラント会談や 1943 年 12 月のカイロ会談といった後の出来事からしか裏付けられない。

しかし、マリアナ諸島がアメリカの進撃すべき正しい方向であると認識することが近代戦の理解の勝利だとすれば、この勝利は部分的なものであった。マリアナ侵攻は、太平洋での戦争の勝利には不可欠のステップであったが、マッカーサーのフィリピン諸島または中国あるいはその両方への攻勢と同格のものに過ぎなかった。南部太平洋での攻勢は、アメリカの勝利のためには二義的な役割しか果たさないものであったが、1944 年まで物資の大規模な支援を受け続けた。ニミッツは、時々、このマッカーサーの本来不要な努力のために大規模な部隊を分遣しなければならなかった。こうした努力の中には、ニミッツを苦勞させたものもあったようである。モリソン資料館には、1963 年にニミッツからモリソンあてに書かれた、ペリリュー島奪取のためにアメリカ軍が被った多大な損害に触れた手紙が所蔵されている。マリアナ諸島の南にあるこの島を飛び越すことは簡単にできたが、ニミッツはマッカーサーの翼側を守る必要性を感じ、第 1 海兵師団を投入して奪取させた²³。その結果、アメリカ軍中で最良の戦闘部隊のひとつに、戦力回復まで数か月を要する甚大な死傷者数を発生させてしまった。

近代戦を完全に理解していれば、マッカーサーの攻勢は明らかに二次的作戦の変形であると考えられたであろう。二次的作戦と考えれば、この攻勢は疑いなく非常に成功だったであろう。マッカーサーは、バットンがイングランド南部でカレー侵攻の準備をさせているかのように見せかけた「幽霊軍団」と同様の部隊の指揮官であったなら、非常に優れた実績を残せたことだろう。

²³ モリソン資料館、HUG FP (33.41) Box 37, ニミッツからモリソンへの 1963 年 4 月 18 日付書簡。